

[第 18 回 常民文化研究講座]

船模型・船図・船絵馬

——和船資料の保存と活用——

日時 2014 年 11 月 15 日(土)13:00-17:00 会場 神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 305 号室

基調講演 「復元弁才船の帆走と海事資料の活用」 昆 政明(神奈川大学日本常民文化研究所所員)

パネル報告

「近藤和船研究所の資料とその特長について」 真島俊一(株式会社 TEM 研究所所長)

「海事資料保存の現状と課題」 小堀信幸(船の科学館学芸部調査役)

「船霊と船の祭り—船の民俗学—」 神野善治(武蔵野美術大学教授)

総合討論 コーディネーター 小島孝夫(成城大学教授)

海と船への関心を高めたい

——資料の再検討と活用の道を探る——

昆 政明

日本常民文化研究所は、創設以来海村資料による海域海民史研究に先駆的役割を果たしてきた。中でも本学招致以前の当研究所財団の初代理事長を務めた桜田勝徳は、日本各地に残る木造漁船の船名を収集整理した「船名集」や、北陸山陰地方に残る木造漁船の中央断面構造の分析から和船の発達過程を論じ、現在の和船研究の基礎を築いた。

今回の講座は、船大工の経験を活かし和船研究の成果を船舶模型により発表してきた近藤友一郎

氏が開設した「近藤和船研究所」の資料が当研究所に受け継がれ、その一部を紹介する企画展「近藤友一郎和船模型の世界」と連携して開催したものである。

近年、菱垣廻船実物大復元船を展示していた大阪市の「なにわの海の時空館」や青森市の「みちのく北方漁船博物館」が相次いで閉館するなど和船資料の保存には困難な情勢となっている。そこには、船という大型資料の持つ特有の問題点も垣間見られるが、海そのものに対する関心の希

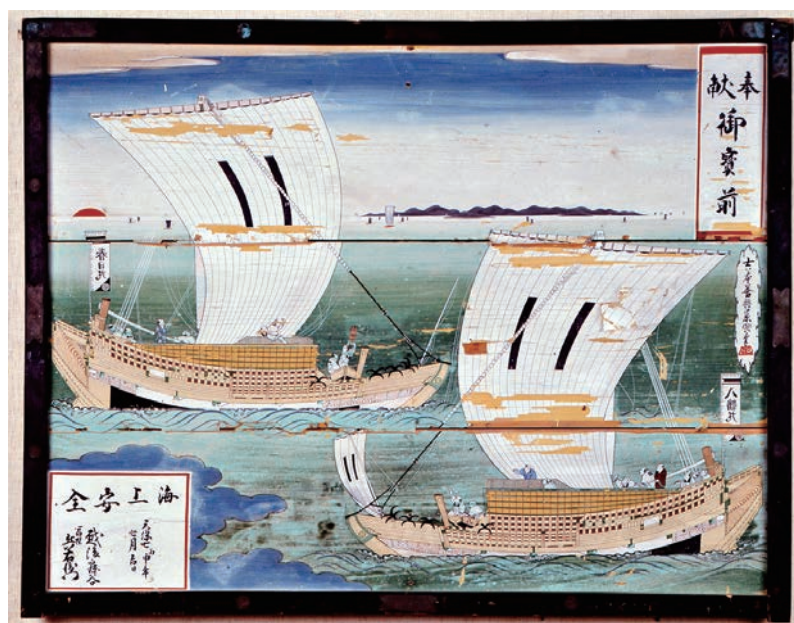


写真 1 船絵馬(青森県深浦町円覚寺蔵)八幡丸(右)はマギリ帆走

薄さも影響している。そこで、今回はこれらの問題を念頭に、和船研究に重要な模型・図面・絵馬資料に焦点をあて、それらの調査、収集、保存と活用について検討を加えた。

はじめに昆政明所員による基調講演「復元弁才船の帆走と海事資料の活用」があり、本年3月に解散した公益財団法人「みちのく北方漁船博物館財団」が建造した北前型弁才船の実物大復元船みちのく丸の帆走実験にあたり、刊本、絵馬、古写真がどのように活かされたかを具体的に紹介した。復元弁才船「みちのく丸」は、現在自力帆走可能な唯一の実物大復元船である。全長32m、全幅8.5mのいわゆる千石船に相当する大きさである。

みちのく丸は、海上において自力帆走することを目的に建造されたもので、船体構造は一部を除いて忠実な復元であるが、帆走に耐えられるよう船材の接合方法等に現代の技術が用いられた。船型は北前型の弁才船を模しており、舷側の垣立など船体艤装は江戸時代末期から明治時代初期の様式を用いている。帆柱の長さは根本から28mでこれに上げる帆の大きさは幅18m、長さ22mで24枚（反）で構成されている。材質は本来は木綿であるが、強度と乾燥を考慮して合成繊維を木綿風に染めたものを使用している。みちのく丸は2006年5月に青森県の陸奥湾内で初めての帆走に成功、同年10月1日には、風上に向かって進む「マギリ走り」の試みにも成功した。帆走方法については、大阪の浪華丸が実施した帆走実験の成果（や）、文献資料、船絵馬や古写真を参考にして試行錯誤の上、実施したものである。特に風上に進む「マギリ」帆走は、帆桁の両端に取り付けた手縄を調節して、帆桁を風の方向に斜めに配置し、風上側の帆の端に取り付けた両方綱を船首方向から引いて帆が風をはらむようにし、帆の下から出ている綱（帆足）の取り付け位置を斜めに變更し、風が入りやすいよう調整した。古写真に記録されたマギリ帆走とみちのく丸のマギリ帆走はほぼ相似の帆走状態として記録さ



写真2 船絵馬（青森県鯿ヶ沢町白八幡宮）洋式帆装の併用



写真3 みちのく丸



写真4 マギリ航行で小浜港に入港する北前船（井田写真館蔵・福井県立若狭歴史博物館提供）



写真5 マギリ航行のみちのく丸

れた。

なお、みちのく北方漁船博物館財団は種々の事情により2014年3月に解散し、博物館も廃館となった。土地、建物、国指定有形民俗文化財を含む主な収蔵資料は青森市に寄贈された。みちのく丸は一部修繕整備の上、青森県野辺地町に譲渡され今後の活用については検討中である。諸外国には多くの海事博物館が活動しており、伝統的帆装の木造船のレプリカが稼働している。みちのく北方漁船博物館の設立、活動、終焉は日本における海事博物館が置かれた厳しい状況を物語っている。

続いて、パネル報告に移り真島俊一（株式会社TEM研究所所長）の「近藤和船研究所の資料とその特徴について」では同研究所の資料整理を担当した経験をもとに、和船模型、船大工道具、材料、および模型製作に使用した資料文献類、全国を回って調査の写真、板図実測図等の概要を紹介すると共に、これらの資料に基づいて焼津の鰹および鮪一本釣り漁船の特徴と変遷を報告した。また、真島が全国を回って調査した知見に基づき船底部の構造、特に敷とトモ敷（船尾）の勾配と海岸地形、傾斜の関係などについて報告した。小堀信幸（船の科学館学芸部調査役）は「海事資料保存の現状と課題」において、全国各地に保存されている雛形（船模型）や木造漁船の現状を報告した。重要文化財に指定されている御座船「千山丸」と洋式帆船「明治丸」の現状をはじめ、各地の雛形、

保存木造漁船の現状と修理保存の重要性と、現実の課題について困難な状況があり、特に海事系の博物館の閉館や個人資料所蔵者の高齢化による、資料譲渡先が大きな問題として浮上していることが報告された。神野善治（武蔵野美術大学教授）は「船霊と船の祭り—船の民俗学—」において造船儀礼を中心に報告した。特に、家（日本家屋）と船（和船）を対比させ、構造や機能、技法、儀礼、祭祀者、

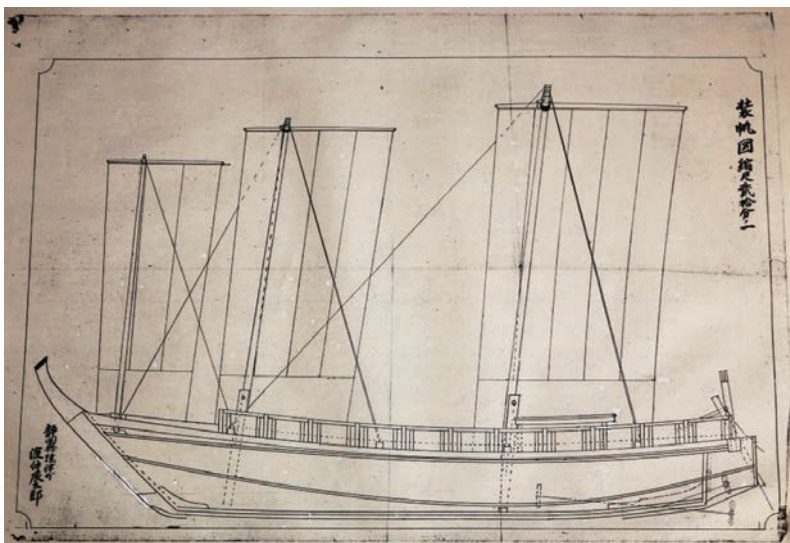


写真6 船図面「装帆図縮尺貳拾分ノ一」（旧近藤和船研究所資料）

祭祀物などについて家大工と船大工の関わり方を比較しその類似性を検証した。また、船を守護する船霊について、その特徴と船祭りの諸相を報告した。次いで小島孝夫（成城大学教授）のコーディネートによる総合討論があり、会場からの質問用紙に答える形で進行したが、時間の関係上、十分な議論を深めるに至らなかった点が反省される。

アンケートの結果では「和船は実物、模型とも大事と思っている人がいる一方で、一般の人は何が重要か分からず関心が無いため結果的に博物館閉館に追い込まれる。もっと魅力ある説明ができないか」と関係者に奮起を促す一方、「和船の構造、造船方法、航法について大変勉強になった」「和船資料の保存の難しさについてよく理解できた」と内容を評価する記載もみられた。反面「討論に時間を割いて欲しかった」「時間が足りなくてもったいなかった」といった記載も多く、また「船絵馬」についてあまり触れられなかった点に不満を述べる意見がみられた。

当日は、船という一般にはなじみの薄いテーマにもかかわらず、首都圏をはじめ岐阜県、富山県、青森県などから100名を超える参加者があり、一般参加者も80名を超えた。企画展も好評で今後も船に関する資料の充実と情報の発信への期待が感じられた。



写真7 修復工事中の重要文化財「明治丸」東京海洋大学蔵



写真8 船霊



写真9 講座会場